

# 好文大名榊原忠次の交友

竹 下 喜久男

## 一 はじめに

『榊原家譜』<sup>(1)</sup>によれば、榊原家は清長が伊勢国耆志郡榊原村から三河に移り、家康の父広忠に仕官したことに始まり、以後清長の子長政、長政の子康政共に家康に仕官し、徳川家との恩顧の関係を深めた。康政は永禄六年（一五六三）に三河の一向一揆に際して初陣を飾り、以後常に家康の麾下にあって奮戦して家康の信任を得、さらに秀忠補佐の臣として重きをなした。康政は天正十八年（一五九〇）小田原北条氏を討った直後、城請取りに秀吉の使者脇坂中務少輔安治、片桐東市正且元らと共に派遣され、同八月上野館林城主として、一〇万石を給され、慶長十一年（一六〇六）五九歳の生涯を終えた。康政の子忠長、康勝いずれも父に先立って二〇歳代の若さで逝ったため、康勝没後半年を経た元和元年（一六一五）十二月、家康の命により大須賀松平家松平出羽守忠政の嫡男忠次が榊原家の遺領を継ぐことになった。忠次はすでに慶長十二年二歳で忠政の遺領遠州横須賀を継いでいたが、改めて館林領一〇万石を与えられ、横須賀領は収公された。忠次一代は松平姓を許され、將軍家の日光社参にしばしば供奉し、上洛には前駆を勤め、寛永二十年（一六四三）三万石を加増されて館林から奥州白河に転じ、さらに慶安二年（一六四九）播州姫路一

五万石に所領を移された。寛文三年（一六六三）二月五日忠次は將軍家綱から「今よりのち時々御側に伺候し、政務のことも存するむねあらば、保科肥後守正之と相議し、老臣等と謀るべき」の命をうけた。この点については『榊原家譜』には「命<sup>セラル</sup>下<sup>テ</sup>執<sup>ニ</sup>政事大者<sup>ノヲスルコトヲ</sup>一列<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>老中<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>」と記している。寛文五年三月忠次の病が革まると、將軍家の使者をはじめ、御三家は各々みずから見舞い、「毎日来問者并使者不<sup>レ</sup>論責賤<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>五六百人<sup>ニ</sup>」とされ、忠次のよき理解者であった林鷺峰は「勲蔭人望之高、生質正直之美、在<sup>ニ</sup>當時<sup>ニ</sup>兼備者可<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>誰代<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>」と嘆いたが、忠次は同年三月二十九日六一歳で逝った。

忠次が家康以来家綱にいたる將軍家の信任を得たことは、武人としてだけでなく政治手腕も凡庸なものでなかったことを示しているが、忠次が文芸に深い関心を寄せる近世有数の好文大名の一人であったことにも注意を払いたい。

榊原忠次が文芸の嗜みの深い大名であったことは、近世広く知られていたようであり、榊原家の家中は後代まで忠次の好書癖を語り草として伝えている。

忠次の文芸活動については、今日においても近世大名の学芸について総合的に扱えた唯一の古典的研究書とされる福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』で触れるところがある。そこでは忠次が文学、歴史に興味を有し、『公卿伝分類』・『続勅撰作者部類』・『新葉和歌集作者部類』を著し、万治三年『武家百人一首』を撰し、この撰が時局に投じたのか、寛文く元禄期に三たび四たび板を改めたとし、さらに忠次が歌道に志深く、詠出するところ多かつたであろうが、集は今佚して伝らざるかと、その概略を述べるにとどまっている。『榊原本私家集』三卷（貴重本刊行会『日本古典文学影印叢刊』九く一二）は忠次のところに書写されたと考えられる平安く室町期（一部江戸初期）の私家集四四部四六冊（榊原家所蔵）を影印したものであり、忠次の文芸への関心を具体的に示した史料である。これに付した簡単な解説のなかで、忠次が平安く室町期の私家集を書写している実態を指摘し、これが肥前松平家に伝えられる私家集群と極めて密接な関係にあるのではないかと推察し、さらに忠次の交友関係にふれ、里村玄仲・同玄陳、斎藤徳元・野々口

立圃・西山宗因らの連歌師、林鷲峰・春徳ら林家の儒者を集め連歌会や詩会を催したことを指摘している。『新潟県史』通史編(3)「第五章 近世文化の形成」においては「榊原氏は藩祖康政以来文武の教育に熱心で、なかでも三代忠次は林羅山・鷲峰父子に学び、また自ら『公卿伝分類』五〇巻などを著したほどであった」と指摘するにとどまっている。一方徳川家の祖有親・親氏が三河に居を構えて以来、三代将軍家光が逝くまでの徳川氏の発展過程を漢文、編年体で忠次が編んだ『御当家紀年録』について、松尾美恵子「御当家紀年録の秘蔵と伝来」では、『御当家紀年録』が長く門外不出の秘本として秘蔵された事情について、同書に添えられた「大中老連判覚書」によって考察し、榊原家をめぐる忠次・政房の相次ぐ死と老臣らの危惧がその背景にあると述べた。高木靖文「高田藩榊原家の蔵書と修道館文庫」は、藩学教育を支えた文庫の成り立ちを越後高田藩の事例を通して考察する立場から、『元禄十二年改 御書物虫曝帳』をとりあげ、榊原家の蔵書構成、その後の移動、書物役の職務内容などにふれ、好學に伴なう収書の実態を明らかにしている。

右にみたように、忠次の文芸活動に関してこれまでいくつかの側面の研究があるが、文芸活動を支えた交友関係については何人かの名前をあげるにとどまっている。忠次の文芸活動や膨大な蔵書を理解するためには、林家を中心とする諸大名の交友関係とともに、さらに忠次が広げた多彩な交友の内容を明らかにすることが重要であると考えられる。本稿ではそのような立場から近世前期林家を中心とする諸大名の交友と、そのようななかでの忠次の交友と文芸活動を明らかにし、近世前期の大名文芸を考える一助としたい。

## 二 林家を中心とする交友

近世初期における大名文芸の展開を考察するに際して、林家の存在を十分考慮に入れる必要がある。林羅山が三代の將軍家の下で、外交、文教政策の立案に重きをなしたことは周知のところであるが、林家が文芸への関心を共にす

る諸大名交流の中核的役割を担っていたことは林羅山以下の詩文集に明らかである。林羅山の詩文集には特に親しく交わった相手について、編者鷺峰が注を加えているものがある。また鷺峰については、詩文集だけでなく、『本朝通鑑』の編集日誌ともいふべき『国史館日録』に好文大名との交友ぶりを詳細に記している。そこにも鷺峰を中心とする交友の状況を明らかにみることができると同時に、好文大名相互の交流を窺うことができる。

羅山父子の交友がどのような広がりをもち、そのなかで忠次がどのような部分を占めていたか、次にみたい。

まず『羅山先生詩文集』に収める詩文に付してある注から、羅山との交友、大名の詩文への傾倒ぶりを示す記事を拾ってみた。〔 〕は筆者の注

(1) 石川主殿頭忠総 (豊後日田、下総佐倉、近江膳所の各藩主)

好<sub>ニ</sub>和歌<sub>ニ</sub>嗜<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>本朝故事<sub>ニ</sub> (中略) 与<sub>ニ</sub>先生<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>旧好<sub>一</sub>

忠総以後孫の昌勝にいたるまで林家と親交のあったことは後述する。

(2) 竹中丹後守重門 号野処 (美濃国不破、河内国安宿部、大県三郡のうち六千石を知行)

頗嗜<sub>ニ</sub>文字<sub>ニ</sub>、其采地在<sub>ニ</sub>濃州<sub>一</sub>、常侍<sub>ニ</sub>駿府江戸<sub>一</sub>与<sub>ニ</sub>先生<sub>ニ</sub>交際最厚

漢詩文を嗜む人として親交があったが、羅山は寛永八年(一六三一)五九歳で逝った重門のために碑文を撰したが、そこには「生嗜<sub>レ</sub>読<sub>レ</sub>書手自鉛<sub>レ</sub>製作<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>文章<sub>一</sub>、一觴一詠終日忘<sub>レ</sub>倦、又聚<sub>ニ</sub>本朝之書記<sub>一</sub>、仮<sub>ニ</sub>日綴<sub>一</sub>、倭語<sub>ニ</sub>連<sub>ニ</sub>倭歌<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>謂<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>文事<sub>一</sub>、有<sub>ニ</sub>武備<sub>一</sub>矣、予交遊二十余年莫<sub>レ</sub>逆<sub>ニ</sub>于心<sub>一</sub>、嘗請<sub>ニ</sub>予講<sub>一</sub>、周詩朱子集伝<sub>ニ</sub> (中略) 府君又善<sub>ニ</sub>写<sub>一</sub>漢字和字、頗有<sub>ニ</sub>楷法<sub>一</sub>、其勢可<sub>ニ</sub>以觀<sub>一</sub>焉、人或語及<sub>ニ</sub>古今兵覽<sub>一</sub>、則告<sub>レ</sub>之詳矣」と和漢の詩文だけでなく、書にも巧みで、和書の蒐集にもつとめた多才の人であった。

(3) 土方丹後守雄氏 (伊勢国三重、近江国栗太二郡のうち一万二千石)

号<sub>ニ</sub>丹後守<sub>一</sub> (於職カ) 駿府江戸与<sub>ニ</sub>先生<sub>ニ</sub>執<sub>レ</sub>交

(4) 伊達左京宗時 (父に先立ちて卒す)

諱宗時、号三可子、予州宇和島城主秀宗嫡子也、好<sub>レ</sub>学与<sub>二</sub>先生<sub>一</sub>交際有年、不幸早世

(5) 井上河内守正利 (遠江横須賀、常陸笠間の各藩主)

与<sub>二</sub>先生<sub>一</sub>交際年久 常談<sub>二</sub>理学<sub>一</sub>

正利については『近代諸士伝略』<sup>7)</sup>に「博学の大儒なり」と宋学に造詣が深いだけではなく「和歌なとも上手にて、優にしてまたやさしく、孟子の気象はある人なりとて聞人感しられしとなり」、「常に平家を好みて語られし」などとして、宋学だけでなく、歌道にもすぐれた人としている。

(6) 永井伊賀守尚庸 (河内国茨田、交野、讃良、若江四郡の内二万石を領し、のち奏者番、若年寄)

信濃守尚政三男、童名大学、後号<sub>二</sub>伊賀守<sub>一</sub>、其姓大江、字子中号<sub>二</sub>壁陰軒<sub>一</sub>、又称<sub>二</sub>閑適子<sub>一</sub>、或号<sub>二</sub>鳧藻庵<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>幼好<sub>二</sub>文字<sub>一</sub>

尚庸は鷲峰が『本朝通鑑』編纂に際してその奉行を務めた人である。

(7) 八木但馬守宗直 (下総、常陸のうち二千石、のち武蔵、上総、下総のうち四千石を知行)

号<sub>二</sub>但馬守<sub>一</sub>好<sub>二</sub>倭歌<sub>一</sub>

(8) 榊原李部大夫忠次 (上野館林、陸奥白河、播磨姫路の各藩主)

為<sub>二</sub>西海之鎮<sub>一</sub>、常好<sub>二</sub>倭歌<sub>一</sub>有<sub>二</sub>藏書数千卷<sub>一</sub>、最嗜<sub>二</sub>倭書<sub>一</sub>、与<sub>二</sub>先生<sub>一</sub>交際二十年、来往頻繁情意甚厚のち羅山父子との交わりについて詳述するが、羅山がもっとも親しく交わった大名であった。

(9) 脇坂淡路守安元 (伊予大洲、信濃飯田の各藩主)

甚好<sub>二</sub>倭歌<sub>一</sub>聚<sub>二</sub>貯倭漢群書数千卷<sub>一</sub>、与<sub>二</sub>先生<sub>一</sub>執<sub>レ</sub>交三十年、情意相親

羅山が安元のために撰した碑文にも「既<sub>レ</sub>而慕<sub>二</sub>古<sub>一</sub>之武人勇士善詠歌<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>是聞<sub>二</sub>倭歌旨<sub>一</sub>于有識者<sub>一</sub>得<sub>二</sub>其風体<sub>一</sub>、所謂

古今倭歌集伊勢源氏等大底窺<sup>ミ</sup>其<sup>レ</sup>蘊奥<sup>ヲ</sup>、乘<sup>レ</sup>輿<sup>ニ</sup>連歌吟咏<sup>ヲ</sup>、賓友<sup>ニ</sup>相娛<sup>ハ</sup>、(中略)嘗<sup>キ</sup>以<sup>テ</sup>余望<sup>ヲ</sup>之故被<sup>レ</sup>授<sup>テ</sup>古今倭歌集之秘笈<sup>ヲ</sup>、其手沢尚新<sup>ナリ</sup>、可<sup>ク</sup>最惜<sup>ニ</sup>哉、余亦依<sup>テ</sup>其<sup>レ</sup>請<sup>ヲ</sup>而講<sup>ス</sup>古文<sup>ニ</sup>、講<sup>ス</sup>南華<sup>ニ</sup>、復講<sup>ス</sup>日本紀神代篇<sup>ニ</sup>、口<sup>ニ</sup>授<sup>ス</sup>職原鈔<sup>ヲ</sup>、太守聽<sup>テ</sup>而不<sup>レ</sup>掩<sup>ハ</sup>尤嗜<sup>ム</sup>書籍<sup>ヲ</sup>、聚<sup>メ</sup>貯<sup>シ</sup>、倭唐簡編<sup>ニ</sup>甚多<sup>シ</sup>、構<sup>ヘ</sup>庫<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>眞<sup>ニ</sup>之細帙<sup>ヲ</sup>、探<sup>シ</sup>管<sup>ヲ</sup>每<sup>ニ</sup>冊<sup>ニ</sup>朱章<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>印<sup>ス</sup>之、居<sup>ル</sup>則充<sup>チ</sup>棟宇<sup>ヲ</sup>、行<sup>ハ</sup>則汗<sup>ス</sup>牛馬<sup>ヲ</sup>、或時唱<sup>フ</sup>諷語<sup>ヲ</sup>、度<sup>レ</sup>曲奏<sup>ス</sup>舞<sup>ヲ</sup>、雖<sup>モ</sup>業<sup>ニ</sup>其<sup>レ</sup>技優<sup>メ</sup>者<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>疑<sup>ハ</sup>則有<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>就正<sup>ス</sup>焉、或時招<sup>キ</sup>佳客<sup>ヲ</sup>高朋<sup>ヲ</sup>於茶寮<sup>ニ</sup>、湛<sup>シ</sup>素壽<sup>ヲ</sup>於甌底<sup>ニ</sup>、表<sup>ス</sup>清玩<sup>ヲ</sup>於牀頭<sup>ニ</sup>、其勝遊亦可<sup>ク</sup>想<sup>フ</sup>

三十年に渉る交友を通じて、下館在番中のいわゆる『下館日記』、古今和歌集に倣う歌風、連歌の嗜、羅山に請うた和漢の書の講義の聴講、藏書家など脇坂安元の関心の広さと深い教養を述べ、安元が自邸の茶屋で親しい友人を招き交歓したことを懷しげに述べている。これらのことは安元との多くの詩文唱酬にみることが出来る。

(10) 荒尾久成 (下総国香取郡のうち千石、のち下野国都賀郡のうち二百石を加えすべて千二百石知行)

頗好<sup>ニ</sup>文字<sup>ニ</sup>屢列<sup>ニ</sup>講席<sup>ニ</sup>

(11) 伊勢兵部貞昌 薩摩藩家老

薩州島津氏家老也、号<sup>ニ</sup>伊勢兵部<sup>ニ</sup>、在<sup>ニ</sup>江戸<sup>ニ</sup>常通<sup>ニ</sup>交義<sup>ニ</sup>、或陪<sup>ニ</sup>講席<sup>ニ</sup>或列<sup>ニ</sup>詩聯之席<sup>ニ</sup>

(12) 佐川田昌俊 号壺斎

高姓佐川田氏、仕<sup>ニ</sup>永井信濃守尚政<sup>ニ</sup>、在<sup>ニ</sup>江戸<sup>ニ</sup>、其後赴<sup>ニ</sup>城州淀城<sup>ニ</sup>、信音不<sup>レ</sup>絶

寛永二十年昌俊が六五歳で逝つた際、羅山が碑文を撰しているが、そのなかに「初飛鳥井亜相雅庸来<sup>ニ</sup>駿府<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>昌俊所<sup>ニ</sup>詠<sup>スル</sup>之倭歌<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>爲<sup>ス</sup>、其<sup>レ</sup>中<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>透逸<sup>ノ</sup>、帰奏<sup>ヲ</sup>、備<sup>ニ</sup>後陽成院之乙覽<sup>ニ</sup>、有<sup>リ</sup>旨<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>、如<sup>キ</sup>此<sup>ノ</sup>之歌出<sup>ス</sup>武夫之口<sup>ニ</sup>、奇哉<sup>ナリ</sup>、或問<sup>フ</sup>法橋昌琢<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、当時能<sup>ク</sup>連歌<sup>ヲ</sup>者誰<sup>ニ</sup>歟<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>幾<sup>ニ</sup>、答<sup>ヘ</sup>曰<sup>ク</sup>、鎮西有<sup>ニ</sup>某甲<sup>ニ</sup>、坂東有<sup>ニ</sup>昌俊<sup>ニ</sup>、由<sup>テ</sup>是<sup>ニ</sup>見<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>啻<sup>ニ</sup>聞<sup>ニ</sup>於玄斎<sup>ニ</sup>談<sup>中</sup>于昌琢<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>」と、昌俊の詠歌が飛鳥井雅庸の手を経て後陽成院の目にとまり、そのすぐれた才が認められている。

右の外に南禅寺金地院元良(号巢雲 最岳)とは「常在<sup>ニ</sup>江戸<sup>ニ</sup>贈答頻繁<sup>ニ</sup>」とし、高野山文殊院立詮についても「初高

野山文殊院勢誉与ニ先生ニ相ニ逢於伏見駿府、其嗣応昌在ニ江戸浅草執ニ方外之交二十余年、昌没詮代レ之号ニ文殊院ニ来往頻繁」と羅山が文殊院の僧と代々親交のあったことを述べている。

つぎに鷺峰をめぐる交友関係をみたい。

羅山の第三子鷺峰（恕 春勝 春斎）は羅山の修史事業を引継ぐべく幕命をうけて寛文三年（一六六三）『本朝通鑑』の編纂に着手すると、上野忍岡に設けた史館における編纂作業を詳細に書き留めると同時に、鷺峰周辺の動きをも書き残した。この『国史館日録』について鷺峰は跋文で「遂日録之日積而成月、月積而成章、年累而七改卷積而十有八、其間毎日之事雖レ不レ預ニ史館ニ係ニ我身者併ニ記之、則謂ニ七年家譜ニ亦可也」と詳細にわたる記録であることを自認し、同時に「使ニ世人一見之則累々反古紙而已、伝而至ニ子孫一見之則史館始末可レ如レ触レ眼、且知ニ我精力在ニ此而聊有レ益ニ於感発ニ乎」と子孫には裨益するところがあるが、世人にとっては反古同然であると謙遜している。

僅か七年間の鷺峰の日記であるが、林家を中心とする人々の交友を知るには得難い史料といわねばならない。『国史館日録』によりながら鷺峰の交友の様子を窺いたい。

(1) 高力左近大夫高長 肥前島原藩主

肥前嶋原城主高力高長、丹波福地山城主松平主殿頭忠房寄ニ書信、此二人皆交際年久、高長者蔵ニ中華書教千部、裝潢尽レ美（寛文四年十一月二十八日 以下『国史館日録』の引用は年月日のみを記す）

鷺峰は高長との交際が後に詳述する松平忠房とともに久しく、愛書家であったことを述べている。高長は明暦二年（一六五六）肥前島原四万石を襲封したが、寛文八年二月二十七日「領地の政務よろしからず、非分の課役をかけ土地を困窮せしむるのよし（中略）下を苦しめ其身の奢を極むる事上聞に達し」改易処分をうけ、仙台に蟄居を命じられた。高長の処分については鷺峰は『国史館日録』の同年二月二十八日条で、前年の検使の報告に基づくものであると簡単に触れ、去る二十五日に会ったばかりで「群国猶如レ彼者可レ多、其独逢ニ検索ニ者不幸乎」と高長が

運が悪かったのだといわんばかりの感想を述べている。高長の蒐書は所領が長崎に近く、中国からの新渡本を入手し易いという地の利を利用して「希世之書」が多く、高長の処分によって蔵書が「若散失流落則可<sub>レ</sub>惜之甚也」として鷺峰は種々幕閣にも働きかけた。その結果「<sup>（三）</sup>隆長蔵書能蔵<sub>二</sub>其文庫<sub>一</sub>」勿<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>紛失<sub>一</sub>、且可<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>其目錄於公儀<sub>一</sub>」（同年二月二十九日）と幕府は高力氏の縁者に達している。鷺峰がその目錄を見て、以前に見聞した書籍が載せられていないと指摘している点からも、長い親交を通して書籍の貸借も頻繁におこなわれたことを推測させる。

(2) 保田若狭守宗雪 旗本

頗好<sub>二</sub>文字<sub>一</sub>相識十余年、且有<sub>二</sub>姻族之好<sub>一</sub>（寛文四年十一月二十八日）  
漢詩文をよくする友人としての交わりがあったことが知れる。

(3) 池田綱政 備前岡山藩主

此人頗嗜<sub>二</sub>倭歌<sub>一</sub>且好<sub>二</sub>翰墨<sub>一</sub>、高庸平生親炙、脊遇殊厚（寛文四年十一月二十八日）  
備前岡山藩主池田光政の嗣子で、光政が藩内の文教振興を積極的に進めたことは知られるが、綱政はむしろ消極的姿勢を示したとされているが、綱政自身は和歌や墨跡を嗜み、鷺峰とも親しかったことを示している。

(4) 石川主殿頭昌勝 伊勢亀山、山城淀の各藩主

此人累世通家也、自<sub>二</sub>祖父忠総<sub>一</sub>与<sub>レ</sub>余交睦（寛文五年九月二十五日）

(5) 寺西将監 広島藩家老

自<sub>二</sub>先考時<sub>一</sub>所<sub>二</sub>通交<sub>一</sub>也、彼頗有<sub>二</sub>好学之志<sub>一</sub>、故不<sub>レ</sub>絶<sub>二</sub>交際<sub>一</sub>乎（寛文五年九月二十九日）  
二人とも羅山以来の交友であったことが知れる。

(6) 凡諸老之中、平生之懇遇且余所<sub>二</sub>依頼<sub>一</sub>前橋少将其随一也、小田原拾遺自<sub>二</sub>其先考<sub>一</sub>、丹牧与<sub>二</sub>余頭考<sub>一</sub>相好、余亦自<sub>二</sub>拾遺未<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>執政<sub>一</sub>時<sub>一</sub>与<sub>二</sub>交際<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>淺、故今不<sub>レ</sub>忘<sub>二</sub>旧交<sub>一</sub>、忍拾遺平生音問雖<sub>レ</sub>稀常感<sub>二</sub>余勉<sub>二</sub>家業<sub>一</sub>頗知<sub>二</sub>我人也<sub>一</sub>、久和



牧昔為<sub>レ</sub>先大君侍臣<sub>ニ</sub>与<sub>ニ</sub>我頭考<sub>ニ</sub>日夜同<sub>レ</sub>席、且余相知既三十年、彼為<sub>レ</sub>人和柔也、故晤語少<sub>レ</sub>所憚也（中略）永伊牧宅在<sub>ニ</sub>小田原拾遺久和牧間<sub>ニ</sub>、且掌<sub>ニ</sub>館事諸務<sub>ニ</sub>、況彼人少年以來頗有<sub>ニ</sub>師資之儀<sub>ニ</sub>交際特厚、故今夕往訪、如<sub>ニ</sub>井河牧<sub>ニ</sub>交際三十余年之学友也、心情互和（寛文五年九月十六日）

當時幕府の重職にあった諸大名との交友を一括して述べている部分である。老中であつた前橋少将（酒井雅樂頭忠清）、小田原拾遺（稻葉美源守正則）、忍拾遺（阿部豊後守忠秋）、久和牧（久世大和守広之）、若年寄であつた丹牧（土屋但馬守数直）、寺社奉行の井河牧（井上河内守正利）との交友、さらに奏者番の永伊牧（永井伊賀守尚庸）は国史館を奉行しており、少年期からの師弟関係のあるものであつた。

以上鷲峰との親交を窺わせる諸大名をあげたが、なかでも昵懇であつたのは榊原李部大夫忠次と松平主殿頭忠房であつた。この三者が互いに親しかったことは『国史館日録』などから窺うことができる。

榊原忠次との関係は「忠次殊嗜<sub>ニ</sub>倭書<sub>ニ</sub>而先考之旧識、余之識韓也<sup>(9)</sup>」と父羅山以来之知己ということ、忠次の邸が林家忍岡の別邸と池を隔てて隣接しているばかりでなく、鷲峰のよき理解者であつた点が注目される。鷲峰が『本朝通鑑』の編纂を命じられた際、忠次はその事業は非常に困難を伴うが、鷲峰を措いてはなし得ないと保科正之に答えたとし、忠次は「頗知<sub>ニ</sub>編集之勞<sub>ニ</sub>」<sup>(10)</sup>とてくれる人と考えている。それだけでなく、『本朝通鑑』が成つてもこれを評価しうる人が如何ほどあるかについて鷲峰は「今世無<sub>レ</sub>着眼之人<sub>ニ</sub>、此書成之日説<sub>レ</sub>之可<sub>ニ</sub>評論<sub>ニ</sub>者水戸相公而已、雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>通<sub>ニ</sub>文字<sub>ニ</sub>、纔知<sub>ニ</sub>此書所<sub>ニ</sub>以為<sub>ニ</sub>重宝<sub>ニ</sub>二者姫路拾遺而已、今拾遺既没是一不幸也、其余頗雖<sub>ニ</sub>好學之人<sub>ニ</sub>、譬<sub>ニ</sub>于国事<sub>ニ</sub>、唯是想<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>重宝<sub>ニ</sub>而已、況於<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>學之人<sub>ニ</sub>乎<sup>(11)</sup>」と嘆じている。忠次が逝つた今『本朝通鑑』を正しく評価できるのは徳川光圀以外にはない。忠次は漢詩文には通じていないが『本朝通鑑』の真価を見抜く能力をもっている。他は好學の人であつても国史に疎く当面の利便を知るにとどまるであらうと、忠次は和學の人ではあるが、鷲峰の無二の理解者として信頼を寄せている。このような関係は羅山以来の長い日常的交流を経て得られたものであらう。忠次周辺の動向を

詳しく記した日記から二、三の日常的交際の例をあげてみよう。

此日御風呂焼（中略）道春老、春齋老、春得老、時春老御出、御料理有（慶安四年七月晦日）

今晚政房様御部屋ニ而春徳老有講釈（承応三年一月十五日）

東叡山江大納言様御参宮ニ付而、卯之刻下御屋敷江御出、道春下屋敷江被成御座候、策帶之御装束被遊辰之下刻御成、御太刀御供、未之刻御法事相調還御、道春屋敷江御越御装束召替、直ニ御本丸、西之御丸江御登城、申之上刻御下屋敷迄御帰（慶安四年四月十七日）

羅山・鶯峰・読耕齋父子らがしばしば忠次邸で風呂、料理の馳走にあずかり、読耕齋が忠次の嫡男政房に大学講釈をおこなっている。また東叡山東照宮正遷宮に紀伊大納言頼宣が代参した際、忠次は太刀を奉じ供奉したが、途中羅山の邸に着替えに立寄るなど、林家と忠次の交わりが羅山以来一通りでなかったことを窺わせる。

福知山藩主松平忠房と鶯峰との交際については、鶯峰が「交際睦亜ニ姫路故拾遺ニ者也」<sup>(13)</sup>と榊原忠次に次いで親しかつたことを述べている。日常的交友について『国史館日録』の随所にみえるが、一、二をあげてみよう。

余以ニ兼約ニ赴ニ姫路拾遺ニ（中略）拾遺席源尚舎父子吉良少将等会集、尚舎与ニ拾遺ニ交際殊睦、尚舎在ニ京隔ニ二年ニ参府、故設饗、吉良与ニ尚舎ニ交厚、故同来、及ニ秉燭ニ而帰（寛文五年一月十九日）

兼日与ニ姫路拾遺ニ約明日赴ニ松忠房別業ニ可々開ニ詩歌筵ニ、然拾遺有ニ微恙ニ而延引（同二月十二日）

とあるように、寛文三年三月忠房が新院御所造営のことを命じられて以来在京することが多く、二年ぶりに参府した際、鶯峰が忠房・好房父子、吉良少将とともに忠次邸に招かれ、あるいは忠房の別邸で忠次とともに詩歌の宴に招かれようとした例をあげることができる。また

作ニ水月琵琶記、是松平忠房所求、彼帰城之時懇請所ニ約諾ニ也（寛文五年九月二十三日）

使ニ安成読ニ増補信長記ニ改ニ正之、是松忠房輯ニ諸本ニ所レ編也、余嘗作ニ之序ニ（同十月三日）

小田原記五冊写畢、使<sub>レ</sub>諸生校<sub>シ</sub>之、是忠房所<sub>レ</sub>藏也、記<sub>二</sub>北条五代事<sub>一</sub>稍詳也(同)

寄<sub>レ</sub>書<sub>三</sub>於松平忠房<sub>二</sub>返<sub>一</sub>増補信長記二十四卷遺<sub>三</sub>好房許<sub>二</sub>以伝<sub>一</sub>達于丹後<sub>一</sub>(同十二月二日)

とあるように、忠房の求めに応じて文を作り序を与え、蔵書を貸借したこともみられる。さらに『本朝通鑑』の草稿について忠房が国史館を訪ねた際一読して、忠房の蔵書に話が及ぶこともあった。鷲峰が予ねて望んでいた肖像画を狩野探幽に描かせるについて忠房が仲介しているのも興味深い。当時江戸画壇を支配していた狩野探幽については「彼当時無雙、誇<sub>二</sub>其芸<sub>一</sub>不<sub>二</sub>輒許<sub>一</sub>者常也、故拳<sub>レ</sub>世嫌<sub>二</sub>其為<sub>一</sub>人<sub>一</sub>」<sup>(19)</sup>と鷲峰は好感を懷いていない。しかし忠房は探幽と親しく、忠房の尽力で探幽は羅山の肖像画を描くことを承諾し、とかく約束を果すことが遅れ、あるいは果さず終ることの多いなかで、早速に描き上げたという。

以上林家を中心とする交友が、父子二代にわたり数十年に及ぶもの、嗜みの分野も宋学、漢詩文、和歌など多彩であり、林家が好文大名との交友を広くもち、その中核的存在であったことが知れる。当然ながら好文大名の個々の交友はそこからさらに大きな輪を形成していくことになる。

次に好文大名相互の交友の事例を榊原忠次と松平忠房にとり、交友の深まりが何をもたらしたかについて考察を進めたい。

### 三 忠次、忠房の交友

松平忠房(元和五—元禄二三、一六一九—一七〇〇)は三河吉田藩主松平忠利の嫡子として生れ、寛永九年(一六三二)八月襲封と同時に刈谷藩に移封、慶安二年(一六四九)二月丹波福知山へ、さらに寛文九年(一六六九)六月には肥前島原に転封された。福知山に移ったころ、すなわち三十歳になったばかりであるが、好文大名としてその名が知られていたようである。忠房の若い時期からの文芸への関心は父祖以来の文芸に親しむ風に依るところが大きい。

深溝松平氏二代好景は和歌、連歌に長じ、戦陣の合間に漢籍に親しむほどの人であり、三代伊忠も風雅の道に親しみ、四代家忠も連歌に親しみ、祖父以来伝えられた古写本を常に携行したという。家忠が天正五年（一五七七）から文禄三年（一五九四）にかけて書き続けた『家忠日記』は、当時家康の事蹟を知る史料として注目されていた。五代忠利は「父祖連歌ヲ好シカ、忠利モ其余風アリ」と伝えているが、『忠利公御日記写』<sup>(15)</sup>（元和八年）寛永九年）をみるに連歌師をはじめとする多彩な諸芸仲間の交流を窺うことができる。二、三例をあげてみよう。

昌琢 昌侃 玄陳江戸へ被下候ニて立寄候、泊被申候（元和八年九月二日）

小堀遠州被寄候、朝めしふる舞申候、小袖ニ太刀馬代持参被申（元和八年九月十日）

将基さし宗桂被越候（寛永元年三月十二日）

朝脇坂淡州へふる舞ニてこし申候（寛永五年四月十五日）

忠利の連歌の師である昌琢をはじめ、昌侃、玄陳（里村北家）、玄仲（同）、友務、友継（忠利のお抱え連歌師）、昌佐、徳元、友甫、玄的、利政などの連歌師をはじめ、八条宮、小堀遠州、脇坂安元、中川将監、本阿弥光和などの振舞、宗子、宗桂、算哲、宗具など将基指しの出入など多彩な顔ぶれが窺える。このような環境が忠利の文芸への芽を育んだといえよう。

文芸の嗜みを共通にする忠次と忠房が日常的にどのような交際を続けたか、まず榊原家の『江戸日記』<sup>(16)</sup>をみたい。現存する日記では忠房が三河刈屋から丹波福知山に転封され、それに四カ月遅れて忠次が奥州白河から播磨姫路に転封されて間もないころの交際の内容が窺える。

松平主殿頭殿へ御返報御屋敷へ至来（慶安四年二月十一日）

松平主殿殿江御見舞（同八月二十四日）

主殿頭殿御参勤ニ付道中迄飛脚被遣（同九月二十四日）

松平主殿頭殿江御見舞（同十月三日）

今晚松平主殿頭様御出御料理有（同十月七日）

今晚松平主殿頭殿江御見舞（同十月十日）

御下屋敷江被成御座、於御茶屋御振舞有、御客松平主殿頭殿、松平弥五兵衛殿（同十月十二日）

今晚松平主殿頭殿江御振舞ニ而被成御座候（同十月十五日）

今晚松平主殿頭殿江御振舞ニ而被成御座候、松平主殿様御内儀様御使者色々御音問有（同十月二十一日）

松平主殿頭殿御使者御内儀様御音問至来（同十月二十三日）

已刻松平主殿頭殿江被成御座（承応二年八月二十一日）

松平主殿頭殿へ蒲萄一折遣之（同八月二十四日）

わずかな間のものであるが、頻繁な往来、なかでも忠房の参府にあたつて途中まで迎えの飛脚を榊原家から差向け、着府すると忠房の労を種々慰めるなど親密な交友を語ってくれる。

忠房の側からの交友を語る史料は忠次没後二年にして忠次の嗣子政房が逝つた際に示した配慮に窺うことができる。  
『福知山藩日記』<sup>18</sup>寛文七年の記事がそれである。

酒井佐五右衛門江戸へ罷下ル、是ハ榊原刑部様御気色ニ付而御文也（寛文七年五月二十九日）

姫路牧宇右衛門方御勘解由、八右衛門方迄飛札来ル、刑部大輔様去月廿四日卯ノ半刻御死去之由申来ル（同六月二日）

刑部様御死去ニ付而江戸へ御使者ニ宇野七左衛門被仰付、今昼御罷下、江戸御飛脚来ル、右ハ刑部様御死去之儀申来ル（同六月三日）

（法九）  
播州姫路へ刑部様御仕事ニ付而為御名代嶋田善次郎被仰付ル（同六月六日）

姫路牧宇右衛門方へ飛脚遣、是ハ御法事之様子聞ニ遣ス（同六月八日）

姫路牧宇右衛門方へ遣候飛脚返事取帰（同六月十日）

嶋田善次郎今日姫路を罷帰、彼地を壹里半程此方みふのと申所ニ仮番所有之、設楽主馬助・加藤太左衛門右兩人罷出候、姫路へハ何方之御使者も通不申候、殿様之儀ハ格別之儀ニ御座候得共、江戸を御指図候方姫路家老衆迄被仰越御断申、何方之御使者も通シ不申候由申付ニ而、色々善次郎も断申候へとも右之仕合故彼地を罷帰ル、尤御香資も不納候事（同六月十八日）

姫路大家老、中老衆を飛脚来ル、右ハ刑部様御死去之時分、殿様を御書被遣候御礼也、嶋田善次郎御使ニ参候、則半途ニ而差留御香資納不申候断申来ル（同六月十九日）

姫路大家老、中老衆、殿様より之御書被遣候ニ付八右衛門、勘解由書状相添飛脚ニ為持遣候事（同七月二十二日）  
福知山藩松平家は榊原家と日常的に音信を通じ合うなかで、松平家は政房の病状伺いに江戸に使者を派遣し、死去の飛脚到着間もなく弔問の使者を出している。また姫路における法要には忠房の名代を派遣したが、格別親交のあった忠房の使者でさえ「みふの」（仁豊野力）で差し留められ、香奠も届けられず帰藩した。しかしその使者を追うように姫路藩重役からの礼状が届けられた。この時政房の嗣子政倫はわずか三歳の幼児であり、姫路藩にとって改易か移封の処分は当然予想されたところであり、江戸からの差図もあって、他国者の城下への立ち入りを憚り、沙汰を待つという事情があったと考えられる。六月十九日越後村上に転封を命じられたが、鷲峰は「去姫路要柵之地ニ赴ニ北越辺隅之地、彼家僕等可憐、故拾遺任ニ大職ニ數年ニ而逝、又不ニ三年ニ如此、家運之微命哉」と嘆じている。

二人の文芸に関わる交友を知る明確な史料は乏しいが、忠次の歌集『一掬集』にその交友の一端を窺えるものがある。『一掬集』は忠次二四歳の寛永五年正月の試毫から六一歳寛文五年病没直前の辞世の歌まで七九二首の詠歌を嗣子政房が年次を追って三冊に編輯したもので、さらに『半歌集』一冊四二〇句を取めた句集が付せられている。

同夜（明暦三年八月十五日）尚舎源忠房住所をほかへうつすへきもよほしありとてよみてをこせ侍る  
今宵そといやおしまるゝ秋の空なれしすみかの月の名残ハ

返し

おしむなと又こむ秋のこよひしも宿にをとらぬ月ハ見るへき

明暦三年（一六五七）一月十九日江戸大火の際、松平家の江戸屋敷は罹災を免れたが、その地を山王権現の社地とするため、屋敷は常盤橋内に移され、さらに浅草、深川に別邸二か所を与えられ、それに伴う作事料銀三百貫目を下付された。<sup>(20)</sup>邸を移るに際して忠房がその感懷を詠じ忠次がそれに返したものである。

庚子（万治三年）九月十三夜尚舎奉御源忠房亭にて詩哥侍りけるに

たのミしハ今宵はかりと長月の名も有明に見るかけもかな

万治三年（一六六〇）九月十三夜忠房邸における詩歌の会に忠次が詠じた歌である。

松平主殿頭忠房新院御所作り給ふことをうけたまはりて今年秋其役とけ侍りて、折節八月十五夜新殿にて月を見るたに曇けれハよめる和哥とて、消息のつるてにかくきこへ侍る

あたらしきみとりのほらにミる月ハくもるうらミもこよひはれ行

返し

名にたてるかけもくもるやあたらしきみとりのほらに月もけたれて

既述した寛文三年（一六六三）三月二十五日新院造営の命をうけ、翌四年八月竣工した折に忠房が詠じたものが忠次に届けられ、忠次がそれに返した歌である。いずれも息の合った二人の交友ぶりを窺わせるものである。

歌を烏丸光広に学んだと伝えられる忠次は詠歌だけでなく、和歌に関わる編著がある。

『本朝各国名所詩歌』は『二十一代集』などから諸国の名所七〇か所を選び、万治三年十一月十二日夜催した宴席

で、参加した知友から右の選んだ名所に因んだ漢詩、和歌各三五首を得て、鶯峰に序文、跋文を鶯峰の弟読耕斎に依頼して一卷にまとめたものである。<sup>21</sup>『武家百人一首』は経基王から源義高にいたる知られた武家百人の詠歌を鶯峰・読耕斎兄弟の助力を得て万治三年に忠次が編集したものである。その他、『新葉和歌集作者部類』、『続作者部類』、『公卿伝分類』、『鎌倉九代後記』がある。また史書として『御当家人紀年録』八巻がある。この書は永享元年（一二四九）親氏・泰親父子が上野から三河松平郷に移ったことにはじまり、慶安四年（一六五二）將軍家光の死にいたるまでの徳川氏の歴史を編年体、漢文で記し、忠次の病没前年の寛文四年に完成したものである。編集し終えて忠次父子が詠じた歌を『一掬集』に載せている。

大樹の御先祖参州へうつり給ひてより此かた、東照宮天下をおさめまし／＼て大猷院殿御代にいたるまでのことを八巻に書しるして、御当家人紀年録と名つけ侍り、竟宴のおりから思ひつゝける

おさまれる八嶋の浪のもしは草かきりつめてもつきぬ行末

同心を政房読侍る

弓筆の道ある御代をうつしとめてゆく末までのかゝりともみむ

忠次のこれまでみてきた文芸活動と並行して好書家、蔵書家としての側面にも注意したい。

忠次の蒐書の状況を知りうる史料として『元禄十二年改 御書物虫曝帳』上・下二冊<sup>22</sup>がある。これは忠次の曾孫にあたる政邦の代に作成された、忠次以来蒐集した一、七八三部六、七七九冊の榊原家の蔵書目録である。忠次については鶯峰から倭書の蒐集家として評価されていたが、「御書籍、歌学御すぎと世間にて申候」「漢書、日本の書をも御僉議なされ、珍書来たり候へハ書写仰付けられ御書役預り」とされただけでなく、後代においても「只今ノ御蔵書ハミナミナ長山様ノ御調ユエニ百五十年前ノ書物ニテ」<sup>24</sup>と忠次代の蒐書について語り伝えられている。

『御書物虫曝帳』については前掲高木論文に詳しく分析されているが、和書が圧倒的多数を占め、長持毎に書名と



冊数が記され、刊本、書写本などの別が明らかにされているものも少なくない。さらに後年の書き入れがあり、元禄十二年以降の蔵書の移動を知ることでもできる。

このような多量の書物がどのようにして蒐集されたか、明らかにすることは困難であるが、前述したように書写によるものが多く、忠次自身の書写によるものもあるうが、大半は能筆の書物役の手による書写であつたであらう。ではどのようにして書写すべき書物が借用できたか。当然忠次の知友関係が考えられねばならない。忠次の詠歌にみえる知友として、前述の人々以外には松平山城守忠国、青山大蔵少輔幸成、石川主殿頭忠総、石川主殿頭昌勝、池田伊予守綱政、井上河内守正利、徳川光圀、脇坂淡路守安元などがある。なかでも脇坂安元は前述した林羅山の撰した碑文にも窺えるように蔵書家であり、忠次との書物の貸借の具体的に知れる人である。忠次の『一掬集』に次のような歌がみえる。

#### 正保二年

脇坂淡路守安元より古今六帖といふ哥書をかりうつして返しつかはすついでに

筆のあとあれハこそしれ古も今も六種の哥のすかたは

安元の返しに

むへなるやいにしへ今の言の葉の六の種をし君かとれしは

#### 正保二年

廿一代集の作者などあつめたるものを八雲軒へかし侍るに、ほとへて返しをこさるとてはたちあまり一代の玉の藻塩草かくそうれしき和哥の浦人

忠次の返しに

君か手にふるれハ玉のもしは草かゝすハ浪の下にくちなむ

正保三年

西三条逍遙院(実隆)の詠哥をあつめし雪玉集を脇坂氏安元へかし侍る時、つゝみ昏に

いかにミて残るひかりハ白雪の玉をあつめしことの葉のあと

安元の返しに

いかてみむ年ふり残る窓の雪かきあつめたる玉の言の葉

『古今六帖』、『廿一代作者部類』、『雪玉集』の貸借が知れるが、忠次と安元の間で日常的に貸借が行なわれていたと推察するのは困難であろうか。貸借が推定されるのは、親しい交友関係にあった鷺峰、忠房らとの間である。

『国史館日録』に次の記事をみることができる。

姫路拾遺借<sub>ニ</sub>示筑波集、新筑波集<sub>一</sub>、又寄<sub>ニ</sub>古本続世継<sub>一</sub>、是為<sub>下</sub>与<sub>ニ</sub>家本<sub>ニ</sub>可<sub>中</sub>校合<sub>一</sub>、又示<sub>ニ</sub>新撰信長記<sub>一</sub>、是世俗流行之信記所<sub>レ</sub>漏也、二十年前江州安土近辺有<sub>ニ</sub>一老人<sub>一</sub>能暗<sub>ニ</sub>信長事<sub>一</sub>板倉周防守在<sub>レ</sub>洛時召<sub>レ</sub>彼聞<sub>ニ</sub>其所<sub>一</sub>談、使<sub>ニ</sub>左右者筆<sub>一</sub>之以為<sub>ニ</sub>冊子<sub>一</sub>、松平主殿頭借<sub>レ</sub>之、拾遺亦借<sub>ニ</sub>主殿頭本<sub>一</sub>写<sub>レ</sub>之者也、余欲<sub>レ</sub>借<sub>ニ</sub>主殿頭原本<sub>一</sub>、然参府稍遲、故先借<sub>ニ</sub>拾遺本<sub>一</sub>（寛文四年十一月二十六日）

鷺峰は菟玖波集、新撰菟玖波集さらに古本今鏡を忠次から借り、林家の蔵本と校合し、また忠次の所蔵する新撰信長記を借覧している。新撰信長記は忠房所蔵の写本をみたいたが忠房の参府が遅れたため、とりあえず忠次所持の写本を借覧したというのである。鷺峰は『本朝通鑑』編纂史料として諸大名の蔵書目録の提出を求めているが、脇坂安元、忠次、忠房はもっとも便宜をはかった大名であったといえるであろう。

忠次と忠房の蔵書の貸借を示す直接史料はないが、両者の蔵書構成の類似に注目したい。『御書物虫曝帳』には書名、冊数が記され、版本、書写本の別も付されているものがある。一方現在伝えられている忠房の蔵書を中心とする『肥前島原松平文庫目録』（昭和三十六年刊）には書型、編著者、出刊書写年次が精査され分類されている。しかも忠

房の蔵書印「尚舍源忠房 文庫」を捺した書籍には△を付しその他のものと区別している。二つの目録を比較して忠次、忠房の蔵書の類似性や相互書写の可能性を論じることとは暴論に過ぎるとの誇りは免れないが、敢えて比較を試みたい。『肥前島原松平文庫目録』中に忠房の蔵書印を捺した書籍は漢籍七三点、和書九三八点を数える。そのうち私撰集三八点、私家集一〇四点があるが、書名のみで『御書物虫曝帳』に収める私撰集、私家集を比較すると、私撰集については二二点、私家集では六七点が一致する。私撰集については五七%、私家集については六四%の割合で書名の一致がみられる。<sup>(27)</sup> 松平文庫本には筆写原本の奥書のあるものはみられるが、現本の書写について記すところはない。文芸が武士の余技であることを忠房が意識し、書写の事情を記すことを憚ったのであろうか。それにしても高い割合の私撰集、私家集の一致は、二人が歌道を嗜み、蒐書に大きな関心をもち、極めて親しい交友関係にあったことから互いに頻繁な貸借と書写によるところが大きいと考えられる。寛文五年春忠次が病臥中に鷺峰に譲ることを約束し、没後政房が鷺峰に贈った八箱二一四冊はいずれも「希世之書也」<sup>(28)</sup>と鷺峰が高く評価したが、それらの書籍の中にも、当然歌書が含まれていたことが察せられ、両者が一致する割合はさらに高くなった可能性がある。

二人は書籍だけでなく関心をもつ文書の書写にも便宜を計り合ったと思われる事柄がある。寛文三年撰津多田神社別当智栄が社殿の修復を願い出、幕府から社領五百石の寄進をうけた。その前年智栄らは多田院に伝来する文書を多数江戸に持ち出したが、忠次は老中稲葉美濃守正則とともに破損の甚しい文書を修補し、一二巻の卷子に表装仕立し、新調した箱に納め寄進したが、その際忠房も文書を閲覧し、主な文書を謄写させたと考えられる。松平文庫に『多田院証文目録』として九六通の多田院文書が謄写され、朱字で人名を補い、巻末に忠房の蔵印を捺したものが伝存している。これも二人の交友を通して得られたものといえよう。

## 四　むすびにかえて

近世初期の大名文芸の展開を考えると、その基底に公家や専門的文芸人との交流とともに、同好の大名相互の交友が大きく関わっていることはいうまでもない。榊原忠次の文芸活動が林羅山・鷺峰父子をはじめ、林家を中心とする好文大名との交友に支えられている点を、特に松平忠房との関係にみてきた。両者の日常的交流だけでなく、詩文の会における唱酬、さらには文芸への嗜みを深めることに随伴する書籍の蒐集等の側面に注意を払いつつ考察を加えた。

近世初期の出版がなお仏書を中心にすすめられ、和書においても教訓的、実用的内容をもつ啓蒙書が多く、歌書を中心とする文芸書は代表的古典書とその注釈書以外には極めて少ないのが実状であった。そのようななかで陸奥磐城平藩主内藤左京亮頼長の蔵書中和書が千余部、その大半が歌書であると鷺峰が驚嘆しているのをはじめ、脇坂安元、松平忠房、榊原忠次など和書の蔵書家として知られた。その蒐集が如何にして可能であったか。大部分は書写によると考えられる。書写については普通書肆が書写し、それを購入する場合、交友関係を通じて借り書写する場合がある。前者については、『国史館日録』にみえるが、京都の書籍商白水が林家に出入し、新板の和書を届けるだけでなく、和書を写し、「昨今白水運ニ新写本于史館ニ凡四百五十冊、命ニ賀璋一点ニ閱之」(寛文六年八月三日)届ける例にみることもができる。大部分は後者によるもので、忠次蔵印ある私家集群と忠房蔵印ある私家集群が極めて密接な関係があるとの指摘があることは既述したが、両者の親交から相互貸借による書写の可能性を予想させる。

本稿がなお多くの課題を残し、隔靴搔痒の感を深くするが、近世大名の交友とそれがもたらした一つの成果を文芸書の蒐集にみようとしたものである。

## 註

(1) 上越市立高田図書館所蔵

(2) 『徳川実紀』第四編(『新訂増補国史大系』41)四四八頁

(3) 『国史館日録』寛文五年三月二十一日条

(4) 同 寛文五年三月二十二日条

(5) 『响沫集』三号

(6) 『新潟大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第二九巻  
第一号

(7) 水戸義公の命により水戸藩士浅羽昌儀が諸大名の系譜や  
古老の談じるところを集めて三六巻にまとめたもので、近  
世初頭の大名人となりを知る好史料である。(国立国会  
図書館所蔵)

(8) 『新訂寛政重修諸家譜』第八巻 三四一頁

(9) 『国史館日録』寛文四年条

(10) 同

(11) 同 寛文五年十月六日条

(12) 『江戸日記』(上越市立高田図書館所蔵)、忠次の時代に  
ついては、慶安四年、承応二、三年の三か年が現存してい  
る。

(13) 『国史館日録』寛文五年九月五日条

(14) 同 寛文八年四月七日条

(15) 『近代諸士伝略』巻一九

(16) 島原市立図書館 松平文庫所蔵

(17) (12)に同じ

(18) 『福知山市史』史料編一所収

(19) 『国史館日録』寛文七年六月二十日条

(20) 『徳川実紀』明暦三年六月二十三日、『深溝松平家譜』・  
『深溝世紀』(島原半原史)下所収)。なお作事料につい

ては『徳川実紀』は銀三百貫目、他の二書は金七万両とし  
ている。

(21) 『本朝各国名所詩歌』(内閣文庫所蔵)に漢詩、和歌を  
寄せたのは、左の人たちであった。

漢詩

向陽子(林羅山第三子 鷲峰) 五首、読耕子(羅山第四  
子 春徳) 五首、春信(鷲峰長子) 四首、春常(鷲峰第  
二子 鳳岡) 四首、狛高庸(辻高庸) 三首、荒長好(荒  
川長好) 三首、浦自顯三首、平信之、赤玄仙二首  
和歌

忠次五首、政房五首、里玄祥四首、惟宗之四首、源忠行  
四首、長元養四首、野吉直三首、小通和三首、竹一重三  
首

(22) 上越市立高田図書館所蔵

(23) 『長山公行実』(内題「拾遺源朝臣忠次公御行跡見聞」)  
国立公文書館 内閣文庫所蔵

(24) 高田藩の儒者大久保好知(鷲山)『撃壤独談』(文政三  
年稿) 上越市立高田図書館所蔵

(25) 脇坂安元の蔵書についてみると、『脇坂中務少輔書目  
録』(金井寅之助編著『八雲軒脇坂安元資料集』所収)が  
参考になる。和書を中心として三三九部一三六〇冊からな  
るものである。この目録中の箱番号は省略し、内容は全く  
同じ写本が金沢市立図書館 加越能文庫に所蔵されてい  
る。

(26) 寛文四年十一月老中から在府の諸大名に蔵書目録の提出を達している。

(27) 『御書物虫曝帳』と『肥前島原松平文庫目録』に共通する書名を私撰集と私家集について書き出してみる。

私撰集

青葉丹花抄 奈良之葉 新撰和歌集 古今和歌六帖 玄々集 今撰和歌集 月詣和歌集 十牀和歌 新撰六帖

万代和歌集 和歌一字抄 東撰六帖 風葉和歌集 臨永和歌集 拾遺風牀和歌集 二八明題和歌集 続五明題和歌集 釈和和歌集 漢故事和歌集 金言和歌集 本朝武家歌仙 松葉名所和歌集

私歌集

大江千里集 師輔集 海人手子良集 義孝集 賀茂保憲女集 惠慶集 曾禰好忠集 道信集 相如集 閑院大將朝光集 御堂関白集 発心和歌集 長能集 清少納言集 紫式部集 公任集 和泉式部集 赤染衛門集 伊勢大輔

私歌集

大江千里集 師輔集 海人手子良集 義孝集 賀茂保憲女集 惠慶集 曾禰好忠集 道信集 相如集 閑院大將朝光集 御堂関白集 発心和歌集 長能集 清少納言集 紫式部集 公任集 和泉式部集 赤染衛門集 伊勢大輔

私歌集

大江千里集 師輔集 海人手子良集 義孝集 賀茂保憲女集 惠慶集 曾禰好忠集 道信集 相如集 閑院大將朝光集 御堂関白集 発心和歌集 長能集 清少納言集 紫式部集 公任集 和泉式部集 赤染衛門集 伊勢大輔

私歌集

大江千里集 師輔集 海人手子良集 義孝集 賀茂保憲女集 惠慶集 曾禰好忠集 道信集 相如集 閑院大將朝光集 御堂関白集 発心和歌集 長能集 清少納言集 紫式部集 公任集 和泉式部集 赤染衛門集 伊勢大輔

(28)

『国史館日録』寛文七年二月二十七日条

(後記) 小論に引用した史料には姫路市史編纂室が市史編集史料として収集したものが含まれている。その利用を許されたことに謝意を表する。

集 女房相模集 能因集 小馬命婦集 頼実集 為仲朝臣集 讃岐入道顯綱集 菅在良集 一宮紀伊集 清輔集

頼政集 実国集 寂然集 林葉和哥集 二条院讃岐集

二条太皇太后宮大式集 師光集 資賢集 長方集 式子内親王集 登蓮集 三玉和歌集 寂蓮集 鴨長明集 閑谷集 金槐集 明日香井和歌集 小侍從集 建礼門院右京大夫集 後鳥羽院御集 土御門院御集 瓊玉和歌集

俊成女集 光経集 隣女和歌集 夢窓国師詠哥 吉田兼好集 洞院公賢家集 草庵和哥集 続草庵和歌集 草根集 飛鳥井雅親集 常徳院御集 宗祇集 柏玉集 春夢草 道賢法師家集 松下集 心珠詠藻 細川玄旨家集